

井内山古戦場と小鴨神社おがも③

平安時代末期の源平合戦頃に、伯耆国（鳥取県西部）の支配権を巡り村尾氏と争った小鴨氏は、その後も在地豪族として存続し、室町時代には幕府から任命された伯耆国守護である山名氏の被官（守護の家来）となっていたようです。

嘉吉元年（一四四二）、播磨・備前・美作の守護で、幕府の要職を務めていた赤松満祐が室町幕府六代将軍・足利義教を殺害し、満祐は幕府の追



岩倉城跡（倉吉市岩倉）



小鴨神社（倉吉市大宮）

討軍に攻められ自害するという事件が起こりますが（嘉吉の乱）、この時自害した満祐の首を取った伯耆守護山名教之の被官小鴨が褒美を与えられたことが「伊勢貞助記」という書物に書かれています。この「被官小鴨」は小鴨之基という人物だと思われ、この乱の戦功により備前国守護も兼ねることとなった山名教之から、備前国守護代（守護の代行をする役職）に任命されており、小鴨氏

が山名氏の下で確固たる勢力を築いていることがわかります。

応仁元年（一四六七）に京都で始まった応仁・文明の乱は長期化し、争いの火種は全国へ波及してここに戦国時代が始まり

ます。山名氏は乱に乗じて旧領回復を目論む赤松氏と播磨・備前・美作の支配権を巡って争います。この頃、伯耆では南条氏・小鴨氏らが勢力を強めており、山名氏の勢力が衰退すると自立の道を歩み、小鴨氏は岩倉城（倉吉市岩倉）を拠点に、出雲（島根県）の尼子氏や安芸（広島県）の毛利氏ら近隣の大名や、羽柴秀吉の中国攻めなどの進攻のはざまで従属したり、敵対したり、一族で双方に分かれたりしながら最終的には羽柴秀吉の支配下となりますが、毛利方の吉川元長によって岩倉城を落とされてしまい、当時の当主である小鴨元清は、南条氏の当主・南条元統と兄弟関係であったことから、南条氏の下に身を寄せ、南条氏の一族となります。

さて、小鴨氏の本拠地にある倉吉市大宮には小鴨神社が鎮座します。社伝によれば応永二四年（一四一七）年に小鴨氏により京都の下鴨神社を勧請して建てられ、「小鴨大明神」と称して小鴨氏の氏神として祀られていたようです。小鴨神社といえ、前々回の話の中で、長藤で戦死した小鴨氏の霊を鎮めるために現在の奥

津神社の傍らに建てられた小鴨荒神（現小鴨神社）があります。地元の言い伝え通りであれば、これらの神社は無関係なのですが、このようにそれほど遠くない場所に存在する同じ名前の神社が無関係というのも不自然な気がします。戦国時代は「南条氏を支持する豪族が奥津に城を構えた」と書かれた当時の書状があり、国境近い町域北部は伯耆勢力の支配が及んだ時期もあったようです。そこで、ここからは想像の範囲ですが、このような情勢下で小鴨氏の一族もしくはそれを支持する勢力などが、この地が小鴨氏の勢力下であることを示すために長藤に小鴨氏の氏神である小鴨神社を勧請して祀ったというところも考えられなくはないのかもしれない。そうであれば、この地で小鴨氏の支配を巡る戦があっても不思議ではないですし、それが平安時代末期の小鴨・村尾の争いと混同し、伝説化したという可能性も考えられるのではないのでしょうか。

参考資料：『新編倉吉市史』第2巻、「鳥取県史だより」第45回、第127回

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733